

序文

「極度の主観性を受け入れることができるのはエクリチュールのみだ、なぜならエクリチュールには表現の間接性と主体の真実のあいだの調和があるから——パロールの領域では（ゆえに、講義においては）不可能な調和、こちらはどうかこうと、つねに直接的、かつ演劇的なものだから。『恋愛のディスクール』についての本はおそらく、セミナーよりも内容の乏しいものかもしれないが、しかし私は本のほうがより真実と考えている。」

——ロラン・バルト『いかにしてともに生きるか』⁽¹⁾

セミナーと書物

『恋愛のディスクール・断章』は1977年春に刊行された。すぐに大きな成功を納め、その年に10万部売れた。多くの言語に翻訳され、舞台化され、人文科学の一般的な読者をはるかに超えた広がりを示すイベントがたくさん催されてきた。1976年にコレージュ・ド・フランスの教授に選出されたことで、アカデミックな意味でも制度的な意味でも人々に認められたロラン・バルトだったが、この書物によって彼のイメージはまたしても混乱し、あるいは華やかなものとなった。社会・政治にコミットした知識人から、構造主義やポスト構造主義の理論家を経て、いまやメディアの世界で活躍するエッセイストとなったのだ。『テキストの楽しみ』や『ロラン・バルトによるロラン・バルト』が準備した——実際には「エクリチュール」が刻印された書物全体を流れる——作家ロラン・バルトという像は、「小説の入り口」で停泊したまま、『恋愛のディスクール・断章』において決定的に確立されたのである。概念も、ほとんど思想もない同書は、情念論というよりも、ロマネスク〔小説的なもの〕に近く、大学人や知識人の読者を狼狽させた。彼らは当時、そして現在でもなお、同書に対してほとんど沈黙を守っており、一般読者に対する成功とはコントラストをなす。テレビ番組『アポストロフ』に招待されたロラン・バルトは、いまや恋愛について、というよりむしろ「恋愛のディスクール」について、ジャーナリストのベルナル・ピヴォが注意深く善良な案内役を務めるなか、フランソワーズ・サガンやアンヌ・ゴロンに語りかけるのだ……

しかし、書物になる以前に、「恋愛のディスクール」はまずもって1974年から76年までの2年にわたって高等研究実習院で行ったセミナーの主題だった。高等研究実習院は、フランス近代文化に関する高等機関の1つであり、制度的な観点から見ればマージナルだが、知的な観点から見れば中心的な機関だった⁽²⁾。

1962年以降、バルトがつけていた「研究課題ノート」（「高等研究実習院第6セクション：記号、象徴、表象の社会学」）は、IMECのアーカイヴに保存されており、それを見れば、連続する講義内容を追っていくことができ、また、さまざまな口頭発表のタイトルと大部分の受講生の名前——その多くは、その後、著名人となった——も確認できる。1974年から76年まで、つまり、コレージュ・ド・フランスの教授として選出される時まで、ロラン・

バルトは、熱心で忠実な聴衆を前に、2つのセミナーを同時に開催していた。1つは1975年に「拡大セミナー」と呼ばれたが、翌年「大セミナー」と名を変えたもので、「恋愛のディスクール：言表行為の問題」に割かれたセミナーだった。それよりもさらに少数に限られた「限定セミナー」は、1976年に「小セミナー」と名を変え、ここでは教員は、自分の指導する「博士論文準備学生」を集め、必ずしも大セミナーの主題と関係の無い「学生の研究」を聞くことができた。

1974-75年度は、この2つのセミナーが、14週にわたって開催された。「限定セミナー」のほうは1974年11月14日から1975年6月5日まで、「拡大セミナー」は1975年の1月9日から4月24日まで。「拡大セミナー」のノートは、バルトがドイツ歌曲を聴く授業にした最終回——この回に関しては何も残っていない——を除いて、保管されていた。より自由な口調で、より即興的だった「限定セミナー」に関しては、聴講していた学生個人が保管しているノートしかない。これら2つのセミナーが運用様式によって区分されるにしても、2つの実践には合流点も存在している。「限定セミナー」は、「博士論文」執筆に関する数回の授業の後に、数多くの口頭発表があったにもかかわらず、「拡大セミナー」の主題とも関連することがあった。事実、4月10日に、ロラン・バルトは「恋愛のディスクールに関する議論」と記載している。同じく「研究課題ノート」によれば、4月24日の回は、「恋愛のディスクールのいくつかのフィギュールについての参加者全員のコメント」にそっくり割かれた。6月5日に開催された最後の授業は「議論」——それ以上の詳細はない——にあてられ、それがおそらく2つのセミナーで取り組んできた作業に対する総括の役割を果たしたのだろう。

翌年、つまり1975-76年度には、ロラン・バルトは授業を「大セミナー」（「恋愛のディスクール、続き」）と「小セミナー」（「言語活動の威嚇」を対象とする）の2つに分けた。休暇を取った教授は、1975年の最初の学期では、「小セミナー」の枠組みでは11月27日の一週分だけ授業を行うことにする。それから10回分の授業は、1976年の1月8日から4月20日まで続けられ、その年の最後は「全員での夕食会」で締め括られた（1976年4月15日と22日の2回のストライキのため、この年の授業時間は短縮された）。「大セミナー」に関しては1976年1月8日から3月19日まで11週にわたって行われた。最終回の最後に、バルトは、研究者の間では、とりわけバルト自身にとっては慣れ親しんだ経験に従って、この2年間の教育経験から1冊の書物を刊行する意図をはっきりと述べた。コレージュ・ド・フランスでの講義（「いかにしてともに生きるか」、「〈中性〉について」、「小説の準備」）は、例外はあるものの⁽³⁾、書物のかたちで刊行されることはなかったが、高等研究実習院のセミナーは多くの場合、論文ないし書物として刊行されるに至った。『ロラン・バルトによるロラン・バルト』の雛形となった「作者の語彙」や、あの『S/Z』を生み出した『サラジヌ』に関するセミナーがそうである。コレージュ・ド・フランスの新学期である1月になる前に、「いかにしてともに生きるか」に関する講義の準備をしながら、ロラン・バルトは、雑多な材料からなる講義ノートを1冊の書物のかたちにする——周知の通りその成果が『恋愛のディスクール・断章』である——というきわめて「困難⁽⁴⁾」な作業のために、夏と秋を捧げることになる。

セミナーから書物へというのが、「恋愛のディスクール」が辿った創造の道筋ということになるのだが、高等研究実習院で少数だった聴衆を前にバルトが行った教育から30年以上

の時を経た 21 世紀初頭に、読者はこの道筋を辿ることになる。現在にいたるまで、一般読者を獲得した唯一の彼の本が『恋愛のディスクール・断章』だった。2 年間のセミナーを転記した本書によって、創造の舞台裏が明らかになり、講義から書物への変容を追うことができる。セミナー全体を収めた本書は、本の「残片」とでも呼べる未収録原稿を収めることでより充実したものになっている。そうすることで、口述から筆記への移行だけでなく、草稿からテキストへ、記述から記述への道筋も明らかになり、バルトが展開した知的な作業の概観をそっくり見ることができる。プルーストに関するラジオ対談⁽⁵⁾の中で、バルトは加筆を行う作家と、削減を行う作家を対比させている。バルトが後者のカテゴリーに属していることは間違いない。構造においても、文体に関してと同様、彼は抹消し、カットし、削減する……

当初 100 と決められていた本書のフィギュールの数は 80 に減らされ、『恋愛のディスクール・断章』の読者が知っているかたちになった。とはいえ、削除された 20 のフィギュールは完成したかたちで作成されており、IMEC のアーカイヴに保管され、いわばいつでも刊行できる状態にあった。すでに発表されたフィギュールに、これら削除されたフィギュールを加え、もちろんそれらをしかるべき場所に配置するなら、バルトの作品と詩学に関する知識を深めることができる。つまり、各自がこれら削除されたフィギュールを『恋愛のディスクール・断章』で採用されたアルファベット順の流れに置き直す必要がある。「年齢」、「交替」、「恋愛」、「かつて」、「腹心の友」、「絶望」、「ドクサ」、「二面性」、「幼年時代」、「引き込み」、「通過儀礼」、「言語活動」、「無気力」、「書物」、「不幸な人」、「瞬間」、「音楽」、「相互性」、「性」、「駆け引き」…… 同様に、覚えておかななくてはならないのは、これらのフィギュールがいくら興味深いものだといっても、バルトは冗長であるか出来が良くないと判断して、それらを削除したということだ。作者に対抗するつもりはまったくないが、書物の刊行へといたる冒険のいくらかを再現したいと願っている。これら未刊の 20 のフィギュールに、長いあとがき（「この書物はどのように作られているか」）が加わる。このあとがきは、読者が知っている線的なテキストの流れとはまったく異なるものである。バルトが長い時間をかけて手直しを加え、清書したこの 30 頁ほどのあとがきは、フィギュールを列挙した後の理論的展望として構想されたもので、書物のかたちにしていく過程で、ずいぶん後の段階で削除されることになり、その代わりより短いヴァージョンが『恋愛のディスクール・断章』の冒頭に置かれることになった。

セミナーを編集する

「恋愛のディスクール」のセミナーのための資料全体は雑多な要素を寄せ集めたものである。とても読みやすい文字で青インクで書かれた言葉の正確な意味での講義ノート、準備用の資料カード、20 頁ほどの恋愛日誌（「年譜」）⁽⁶⁾——バルトの創作過程を理解するためには極めて重要なものだ——がそうだ。これらに加えて、バルトが直接は活用しなかった 3 つの補足資料がある。クロード・ドビュッシーの書簡の選集⁽⁷⁾、キューバ人作家セベロ・サルドゥイのフランス語で書かれた 8 頁のタイプ打ち原稿（『身体の上のコノハチヨウ：布、偶像』⁽⁸⁾）、そして、ジャック・ラカンの思想についての手書きの入門書で、ロラン・バルトのために⁽⁹⁾、精神分析家のユベール・リカールによって書かれた一般向けの一種の概説書である。